



和の道具で 暮らす

ケーススタディ

特集
居こちの
よい住まい
その5

手ぬぐい てぬぐい
クロスにタオル、スカーフ
まで、暮らしの隅々で縦
横無尽に活躍。多彩に選
べるデザインも魅力。

盥 たらい
足湯に、子どものプール
に、クローラーボックスに。
素材を選べば、目にも楽
しいことこの上ない。

乱れ箱 みだればこ
平安時代の女性の調度
に由来するという、蓋の
ない浅い箱。衣類などを
暫時片づけるのに最適。

箒 ほうき
棕櫚の箒で丁寧な掃除
ば、心も自ずと整う。フ
ローリングにも有効だ。
(協力) 白木屋傳兵衛

座布団 ざぶとん
狭い部屋でこそ力を発
揮。可動性の高いソファ、
と捉えてみると、使い方
の幅がぐんと広がる。

かつて、生活のシステムは、世代から世代へと

受け継がれてきたものだ。

しかし、現代の暮らしは過去の知恵が断ち切られた
地点から洋のものをがむしゃらに取り込んだことで、
どこかバランスを欠いてしまっているのではなからうか。
今からでも遅くはない。まずは先人が伝えてくれた
美しく理にかなった道具を手がかりとし、

暮らしの周辺を見直すことから始めてみよう。

文／加藤裕子 撮影／栗林成城

治以来、和洋折衷という試行錯誤を続けてきた日本人の住まい方は、今、かなり「洋」の方に振れていて、畳のない家も少なくない。

食事はテーブル、くつろぐのはソファ、寝るのはベッドが主流となりつつあるものの、「洋」の住まい方をすっかり体得したわけでもなく、正しいベッドメイクの方法もボックスシートのたたみ方も脱いだパジャマの置き場所もよくわからないままだから、つい散らかった状態になりがちだ。

こんな風に家がちやちやと散らかってしまう原因は、単に消費社会に生きる私達がモノを買って増やさずにはいられないから、というだけでなく、世代から世代へと受け継がれてきた住まい方の知恵が途切れてしまっていて、その場しのぎのハウツーや流行りに流され、根無し草のようにふらふらと定まらないまま暮らそうとしていることもあるように思う。もし、生活の中で伝えられたきちんと正しい方法でベッドメイクされ、きれいにたたんだボックスシートが引き出しにピシッとおさまり、脱いだパジャマもあるべき場所での次の出番を待っているという状態であれば、寝室の乱雑度合いは、かなり違ってくるはずだ。

私自身も、いい加減にベッドメイクされたベッドで寝ている口で、そんな自分の住まい方にどうにもしっくりしない違和感を抱えている。団地やマン

やわらかな熱が

心の芯まで

暖めてくれる火鉢。



ションで育ち、いわゆる「和」の家に住んだことがない私だが、古民家や町家での暮らしを見聞きすれば、「理想的だ」と憧れずにはいられない。所詮『借り物』の「洋」の住まいではなく、いっそ和の住まいに回帰したいと思いつつ、諸処の事情でそうもいかなかったりする。

手ぬぐい

てぬぐい

そんな私が、先人が培ってきた住まい方の知恵をたどる手がかりにしてい

るのは、和の道具である。たとえば、

手ぬぐい。かつては生活必需品だった和の道具の多くが、今はとても手が出ない高級品になってしまっていたり、使い方すらわからなくなったりしている中で、手ぬぐいは値段も手頃だし、使い勝手も悪くないから、手始めに試すにはうってつけだ。手拭きタオルとしてはもちろんのこと、入浴の際に使用えば、角質も取れて、すっきりと洗い上がるし、洗い髪をとりあえずまとめておけば、髪も早く乾き、見た目も良いというおまけがつく。汗ばんだ身体

から、時間を問わず掃除できるのも、

箒の利点だ。何より軽く、長いコードも充電も不要で、思い立った時にさっと使えるのが有り難い。

掃除機をガッツとかけている時と違い、箒で掃除をするにはがさつに動かしていたのではダメで、自然と丁寧に、静かな心持ちで掃くようになる。家をきれいに掃き清め、心もすっと落ち着かせる箒は、まるで魔法の道具のようだ。色々なものが出回っているが、やはり昔ながらの箒草や棕櫚の箒が一番使い勝手が良いように思う。ちなみに、棕櫚の箒は、フロアリングに使うと艶が出るという効果も期待できるそうだ。

乱れ箱

みだればこ

パジャマに限らず、一度袖を通したもののまだ洗濯しない衣類の置き場所もどうすればいいのか悩ましいが、解決策のひとつに乱れ箱がある。旅館などでは糊のきいた浴衣が収められていたりするが、家庭ではまさにパジャマの置き場所にびったりだし、翌日着る服を揃えておいてもいい。置き場所に困るものとしては、バッグなどの来客の持ち物をそこに入れてもらうこともできるだろう。

使いやすいサイズであれば、「乱れ箱」という名前のものでなくても、カゴや丈夫な空き箱でも十分に使える。持ち運びができるから、子どもも「マ

受け継がれた

住まい方の知恵を柔軟に取り入れる

イ乱れ箱」を抱えて、親の目の届くところで着替えられる。我が家では乱れ箱代わりのカゴを使い始めてから、「なぜ、こんなところに？」と思うような場所で、脱ぎっぱなしの子どものパジャマがみつかるということがなくなっ

盥

たらい

少々浅いが足湯もできる盥は、ついシャワーだけですませがちな人に勧めたい。足湯専用の道具が足湯にしか使えないのと異なり、盥があれば、赤ん坊の沐浴にも、幼い子を遊ばせる夏場のビニールプール代わりにもなる。

かつて盥は何より洗濯に欠かせない、だからこそ真っ先に必要な所帯道具のひとつだった。今は洗濯機があるから盥は生活必需品ではなくなったが、何もかも洗濯機で洗えるというわけはない。そのまま洗濯機に放り込めな

い泥だらけの衣類や色落ちするもの、手洗いが好ましい小物類、セーターなどを洗うには、やはり盥があれば便利である。入浴や洗濯以外にも、たとえば冷蔵庫に入らない大きなスイカも盥を使えば丸ごと冷やせる。なければないで気づかないが、一度使い出せば、こんなに便利なのか、と目が開かれる想いがする。盥は、そんな道具だ。

座布団

ざぶとん

ソファはあっても、そこに座るというよりは、ついソファを背もたれに床に座ってしまうのは、なんとなくその方が身体が落ち着くからだろう。しかし、ただ背もたれ代わりに使うには、ソファは値が張るし、場所ふさぎでもあり、処分には粗大ごみ料金も発生してしまう。それならば、いっそ座布団でいいのではないか、という気がして

を拭う時の、熱い湯に浸してぎゅっと絞った手ぬぐいの肌触りの気持ちよさは、タオルでは味わえないものだ。台所では、食器拭きに、台拭きに、蒸し器の蓋にはさむふきんに、後で食べる家族の食事の埃よけに、それから弁当箱を包むなど、いくらでも使い道がある。しゃれた柄のものなら、ちょっとしたスカーフ代わりにできるし、ささやかな贈り物にしても喜ばれるだろう。かつては、ピッと割いて、ケガの応急処置や切れた鼻緒のすげ替えにも活躍した手ぬぐいは、ひらりと薄い布切れ1枚でこれほど、と感嘆するほど汎用性がある。しかも、使い古せば雑巾になるまでとことん使え、無駄がない。シンプルにしてフレキシブル、肌触りの良さ、美しいデザイン、と手ぬぐいの良さを数え上げればきりがなが、少ないモノで暮らしを円滑にまわしていく知恵が、手ぬぐいのような道具にもこめられているように思う。

箒

ほうき

洋風の住まいだからこそ見直したい和の道具もある。たとえば箒は、オールフロアリングにびったりの、優れた掃除用具だ。掃除機ではどうしても巻き上がってしまうホコリも、茶殻を撒いて箒で掃けば、それほど気にならない。部屋の角やサッシの棧にたまったゴミもうまく掃けるし、音が立たない

くる。座布団を枕にごろ寝するには、畳か

あるいはそれに代わるクッション性のある床が必要だが、使わない時には片づけておくことができるから、その分部屋を広く使える。あたりの硬い椅子のクッション代わりにしたり、タオルをかけて赤ん坊の昼寝に使ったり、季節に応じてカバーも簡単に掛け替えられるなど、座布団にもやはり使い勝手の良さがある。

布団やちゃぶ台もそうだが、座布団のような可動性の高い道具は、スペースが限られた住まいでソファを買う前に検討しても損はないのではないかと思う。

屏風、簾、火鉢、蠅帳……一世代

すだれ

はいちよう

前まではあたりまえに使われていて、今ならまだ入手可能な和の道具は他にも色々ある。単に昔に戻るのではなく、和の道具を今の暮らしに取り入れてみることは、本当なら現代に受け継がれていたはずの和の住まい方の知恵と工夫を思い出す手がかりとなるだろう。そして何より、和の道具は使っていて心地いい。木や竹、和紙、木綿という日本の風土で育まれた素材だからこその手触りの良さに、道具としての優れた機能が相まって、使えば使うほど、使い手の気持ちを優しく豊かにしてくれる。そんな道具を身近におくことは、暮らしの中の幸せではないだろうか。